# 梅田作次郎先生の思い出

布川　昊

## Ⅰ　はじめに

### 1．謝辞

ご紹介いただきました布川でございます。私どもの幼い作品を、このような立派な立命館大学の平和ミュージアムに、保存していただく事になり、大変有難い事だと感謝しております。また、私どもの作品を研究テーマとして取上げて下さり、このように、保存から展示・講演会へと、一方ならぬご尽力をいただいた吉田ちづゑ様に、この席を借りて、心からお礼申し上げたいと存じます。

先程は、吉田さんから、梅田先生の絵画教育と、国民学校当時の文部省の指導要領との関係についての、綿密なご研究の成果をお話いただきまして、私どもも「アッそうだったのか」と初めて知った所も多々ございまして、目から鱗が落ちる思いが致しました。吉田さんの、このような客観的なお話・分析に比べまして、私は梅田先生の教え子としての個人的な思い出を、主観的に、少々独断と偏見を交え、時には脱線しながらお話させていただきたいと存じます。

### 2．北朝鮮の美女軍団とコスモスの群生

私は、いま大津に住んでおりまして、家の近くの田園地帯をよく散歩します。そこの休耕田がコスモス畑になっておりまして、赤とピンクと白のコスモスが、この間まで一面に咲き誇っておりました。皆さんもご記憶かと存じますが、この夏、韓国でアジアの競技大会が開催されましたが、そこへ北朝鮮から、大勢の美女軍団が送られてまいりまして、華やかな踊りを見せてくれました。風に揺らぐコスモスの花の群れが、美女軍団を思い起こさせ、美女軍団とコスモスの花々が一体となって、散歩を楽しませてくれました。これも梅田先生のご指導の賜物と言いますと奇異に思われるかもしれませんが、実は絵画の時間でしたか、日本人と朝鮮の人々との色彩感覚の違いについて話された事がありました。日本女性の和服は豪華・華麗ではあるが、その良さは側へ寄って、よく見ないと分からない。それに比べて、朝鮮の人の服装は、遠くから一目で、その対比の鮮やかさが目に映る。２色の組み合せの感覚において非常にすぐれている、と教えて下さいました。日本の神社の巫女さんの服装も白と赤ですが、朝鮮服の色合いはもっとデリケートな気がします。布地の風合いと色合いとの相乗効果が一層鮮やかな雰囲気を醸し出しているように思います。

### 3．ジャンバルジャン物語

これは昨年の事ですが、この頃はやりのブック・オフもよく覗きます。その時、文芸春秋社出版の『レ・ミゼラブル百六景、―木版挿絵で読む名作の背景―』という本が目に止まり、求めました。表紙はいたいけな素足の少女コゼットが、自分の背丈より大きな箒を持たされ掃除をしている、この本です。（と回覧する）梅田先生は、私どもが静かに、そして真面目に授業を聞いていると、そのご褒美に、10分ないし15分、授業を早く切り上げて「ジャンバルジャンの物語」を話して下さいました。私どもは時には、授業が始まる前に、先生がいらっしゃるのを、姿勢を正し黙想してお待ちしていました。そして先生が教卓の前に立たれると目を開け、ドッと笑いました。先生も私たちの企みを察して、「予定通り、早く終わればな」と一緒になって笑っておられました。私どもが６年生終了までに、物語が終わるように計画しておられたようですが、残念ながら、５年生終了の時点で先生とお別れしなければならなくなり、話は尻切れトンボになってしまいました。悪漢テナルディの下で虐待されているコゼットが、市長の職を投げうったジャン・バルジャンに救い出されるあたりで終わったと記憶しています。

当時は、軍国主義一色でした。梅田先生の教育も例外ではありませんでしたが、その中で絵画指導と「レ・ミゼラブル」の話が特殊な色彩りを添えていたように、私には思われます。これから、梅田先生の絵画教育と道徳教育について、私の思い出をお話し、その後で、もし時間があれば、現在問題になっている「学ぶ意欲の低下」、「ゆとり教育」、そして小学校から大学にわ

たる「教育改革」についての私見を述べる、そんな風にお話させていただこうかと考えております。

## Ⅱ　絵画教育

### １．先生との出合い

私どもが生まれましたのは満州事変の翌年、5.15事件の前後すなわち昭和７年（1932年）ないし８年（1933年）で、ちょうど70歳古稀という事になります。小学校へ上がりましたのが、昭和14年（1939年）です。その次の年が皇紀2600年で、全国的に祝賀がありました。有名な「零戦」こと海軍の零式戦闘機は、この年に作られたので「０式」という訳であります。１年生の時は男女共学でしたが、当時は男女７歳にして席を同じうせずというので、２年生から生木を割くように男女別々にされました。そのせいで却って、女の子に淡い関心を抱くようになりました。罪なものです。さらに次の年、私どもが３年生の時、昭和16年（1941年）12月８日が、あの大本営発表『帝国陸海軍は本８日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。』という運命の日なのであります。２年生までは尋常小学校で、３年生の時に国民学校に変り、文部省の指導要領の大改革がなされたのは、吉田さんのお話の通りであります。

私のクラスの大部分の諸君は１年生の時から梅田先生に担任して頂いたのですが、私は２年生から担任していただきました。女の先生から男の先生になったのが嬉しく思いました。私事になって恐縮ですが、私はどういう訳か、女の先生に嫌われました。少なくとも疎んじられたと僻んでおります。森鴎外の自伝的小説なんかを読みますと、鴎外は女の先生に可愛がられたようであります。私の兄も弟も女の先生に可愛がられましたが、私だけが例外です。幼稚園でも小学校でもそうでした。一つ年上の姉に蛇蝎の如く嫌われたのはやむを得ないとしましても、母からも疎んじられました。画家の娘として育った母は、器量よしか否かで人を評価する傾向がありました。おとなしく美男の兄を溺愛しておりました。私が不満を訴えると最初の子は、夫婦仲の良い時にできたからなと次男坊には酷い事を言い放って憚りません。母の理論によると、両親の仲が良いと美男美女が生まれる。従って私生児には美男美女が多い、とこうなります。女には男を見る目が無いと今なお信じています。

そんな訳ですから、私は２年生になって、男の先生に持っていただけるようになった事を大変嬉しく思いました。期待した通り、２年生から５年生まで、私が組で一番梅田先生に可愛がられたと自惚れています。この前列に腰掛けている級友達もそれぞれ「自分こそが」と思っているかもしれません。

### ２．絵画の指導

尋常小学校の時は１、２年生はクレヨン；３、４年生がクレパス；５、６年生になると水彩絵具という風になっていたと記憶しています。当時の絵の教科書のクレヨン画は、優しい軽いタッチの女性的な絵で、前の皇后がお書きになった絵のようだと思った事を覚えています。国民学校になって、今申しましたような区別・壁が取除かれ、自由な伸び伸びとした力強い男の児の絵に変った、そんな風に私には感じられました。梅田先生は、この変化を我意を得たという風に感じていらしたように思われます。先生のお考えになっていた絵画教育と共通する所があったのでしょうか。だから絵画教育に特に力を注がれたのではなかったかと、今になって思い当たります。

クレヨンとクレパスを併用する。クレヨンの上からクレパスを塗り、必要ならナイフで上を削る。ちょうど油絵のような技法ですね。そんな事も教えていただきました。そして工作の時間に竹でナイフをこしらえ、それを図画の時間に使用しました。

またクレパスの上に水彩画を重ねる、というような事もしました。空のように広い部分をクレパスで塗りつぶすのは大変な労力を必要としますが、青い水彩絵具でサッと塗るのは簡単ですから、私達は大いに活用しました。そんな絵は残っていますでしょうか。

クレパスの絵は、クレヨン画と違って、隅々まで完全に塗りつぶすのが良い描き方であるとか、空を画くには空色で画用紙を塗りつぶすよりは、藍色をクレヨンのようなタッチで薄く塗っておいて、それを指先で伸ばし、その上から白色をしっかり塗れば空の感じがでるというような事。クレパスの命は白色の使い方にある。従って白色が２本、あるいは１本大きいのが入っているのだとも教わりました。なお水彩画の命は水である。クレパスの白に相当するのが水であるとも教えていただきました。それで私なんかは、画用紙をすぐ水浸しにしてしまい、画いている時間よりも乾くのを持っている時間の方が永かったように記憶しています。中学へ上がった時、中学の絵の先生から、君は水の使い方が上手い、筆さばきは玄人並だと、お褒めいただきましたが、これも梅田先生のご指導と、私の少々ずぼらで思い切りの良い性格がうまく合ったのだと思っております。ずっと後になって、チャーチルの日曜

画家の先生が、同じように指導されたと、彼の随筆で読んだ記憶があります。

絵画の時間には、よく写生に出かけました。他の組と一緒の事が多かったように思います。そんな時、先生は他の組の生徒にも手をとって指導しておられました。私の組は２組で絵の先生、１組の先生は書道の先生、３組は音楽の先生でした。偶然でしょうが、そうなっていました。

他の組の先生は、遠近法で絵に深みを付けるのだと、通り一遍な教え方をなさっていたようですが、梅田先生は遠景・中景・近景と３つに分け、一番描きたいと思う物を中景に置き、遠景と近景によって、それを引き立たせるのだと丁寧に教えて下さいました。そして写生から帰った後の講評で、黒板に作品を並べ、この絵には近景が無く少し平板になっていると仰って、焦茶色を使って少々荒っぽいタッチで稲架を画き加え、これで絵全体が引き締まったと仰いました。もっともせっかくの労作に先生が手を加えられた事を、当の本人は少々不満のようでしたが、私には先生の意図が良く理解でき、その後、私も真似をして、絵を画き上げた後、思い切って乱暴に、近景を加えた事もありました。また雪景色を画くには雪以外の部分を、実際に見えている色調よりもずっと暗くしなければ雪の感じが出ないという様な指導も懐かしく思い出されます。

### ３．上村松園女史の事

また、こんな経験も話して下さいました。先生が京都で、ある展覧会を御覧になった時の事です。会場で１人の上品な老婦人が展示の絵を模写していらっしゃる。そっと近寄ってご覧になると、絵の手の部分を描いていらっしゃる。その絵の素晴らしい事、とても足許にも寄れないと驚かれ、係りの方に、あの方は誰方ですかとお尋ねになると、「上村松園先生です。」との返事、その時の感激は忘れられないと、お話になりました。

私は家へ帰り、母に話しました。「村上やったかな、村のつく偉い女の絵かきさんの話やった。」と言いますと、母は少し考えて「上村松園さんと違うか？」「そうそう、そんな名前やった。」「それなら足許にも近寄れんのは当たり前や。」と言って、「松園さんはお父さん（母の父）と同門や、松年先生の所で一緒に絵を習っていた人や。」と言いました。その時初めて私は松園女史の名を知りました。画学校では祖父の１年後輩、夜は鈴木松年先生の塾へ通い、一緒に絵に精進した仲だと知ったのは、ずっと後でした。松園女史の事を母はそれ以上詳しくは話しませんでした。ただ、松園女史の「序の舞」は気品がある。この気品が好きやと、婦人雑誌の附録か何かのこの絵を切り取って、衝立に貼って眺めていました。扇を持った右手、何も持たない左手の格好を自分でもやりながら、冒し難い気品があるやろと言っていました。私は姿勢や手の形に意志の強さは感じても、その口許が母の私を叱る時の形に似ているので一寸好きになれません。むしろ「鼓の音」の女性の優しさに惹かれました。どちらも赤い和服姿ですが、何となく川口順子外務大臣の赤い服と相通じるものを感じます。「大臣は赤い服が良くお似合ですね。」と大臣のご主人に言いましたら、「いやあー」とテレていらっしゃいました。川口大臣のご一族と京都の関わりについては、後ほど触れる事もあろうかと存じます。

### ４．絵の上手な児と下手な児

この展示会で当時の級友の絵を、このように一堂に展示して見る機会を与えられて感じた事は、当時上手だと思われていた児の絵がそれほどでもなく、むしろ下手だと思われていた児の絵が素晴らしいという事です。あまり具体的に言うのも憚られますが、Y君の絵をいま見てびっくりしてしまいました。悪さはする、掃除はサボる、アカンタレと思っていたYが、こんな素晴らしい絵を画いていたのかとショックを受けました。先程吉田さんが映し出しておられたQ君の静物画なども、とても小学４年生の作品とは思えないほどの出来栄えです。私の絵など恥ずかしくて隠してしまいたいような気持でいっぱいです。梅田先生は、絵画の時間などにも、普段あまり目立たない児の手を取って指導し、その作品を皆んなに見せながらこんな風に色を重ね、明暗をつけるのですよなどと具体的に指導されていたように思います。

そう言えば、こんな事もありました。先生が教室の中で絵の評価をしておられた時の事です。それを生徒が取り巻いてみていました。遠慮のない生徒の１人が「先生、そんな絵に４重丸なんて付け過ぎやで、３重丸とちやうか。」と言った時、「うちの生徒の絵は、よその組より一段上や、よその組やったらこの絵は５重丸貰える。うちだから４重丸や。」と答えられました。

当時は、今でもそうでしょうが、他の学校との合同の展覧会がある時など、各学年の各クラスから２、３人の絵の上手な児が選ばれ、放課後、特に指導を受ける事がありました。普段から上手だと言われている生徒だけではなく、あまり上手だと思われていない生徒

でも、その直前の絵の時間にいい絵を画くと、放課後残して特別に指導される事もあったように記憶しています。そんな時その児は大変感激していました。しかし余りに指導が行き過ぎて、生徒達の絵の水準が揃い過ぎ、面白みが薄れてしまった面も否定できません、４年生のクレパスの絵など見るにつけ。

### ５．先生はもともと絵は上手でなかった？

梅田先生は、こんな事も仰った事があります。自分は小学校の頃から絵は下手であった。書道の方はいつも良い点を貰っていたが、絵の点は悪かったと。その話を母にしますと言下に「そんな事ないやろ。生徒を励ますために仰ったんと違うか。先生はお小さい時から絵が好きでお上手だったに違いない。」と言いました。

今回、改めて先生の筆跡を拝見して、書がお上手であった事は間違いないと確信しました。で絵の方は？私は大学に入りましてから毎年のように日展を見てきました。初めの頃、展示されている絵を見、これ位なら梅田先生の方がお上手だと思っていました。その昔、私たちと一緒に写生されていた先生の風景画を思い起しながら、そんな風に思いました。しかしある時、舞鶴へ帰り、偶々その思い出の画に会いました。アレー、こんな絵だったかしら、余りお上手ではないとショックを受けました。どうやら私の絵画に関する知識や鑑賞眼が進むにつれ、記憶の中にある先生の絵もどんどん成長し名画になっていたようです。その時先ほどの先生の述懐を思い出しました。吉田さんもチラッと口にされたように、苦手を克服するために誰方かに絵を習われたのではないかと想像しています。その精進努力の過程で、絵画指導の真髄を会得されたのではないでしょうか。例えば、こんな事も仰っていました。日本画は線が生命ですが、その線がうまく出せないと、思い倦んでいた時、書道の先生が平仮名をお書きになるのを見て気が付いた。手の肘を机から離しておられる。それを真似たら、やっと思うような線が描けたと。

私にも、こんな経験があります。よく美術展を見に出かけましたが、山元春挙の精緻極まりない風景画を見て、物臭さな自分には、こんな絵は逆立ちしても画けるようにはならない。しかし横山大観のような絵なら…と思いながら鑑賞していました。それから助教授になって初めて300頁位の応用数学の本を書いて出版しました。２～３年執筆に係り切りになりました。全体の構想・材料の配列・証明の細部の検討と試行錯誤を繰り返しました。その経験を通して春挙の絵にも何とか近づき方が分ったように思いました。春挙は写真なども写していろいろ検討を重ねたと聞いております。竹内栖鳳も人力車を傭い、車を往復させながら風景を描いたと、大学の美術の時間に聞いた事があります。小学生の頃は絵を１時間か２時間で画き上げるわけです。１年も２年もかけて１枚の絵を仕上げる事なんかできません。ちょっと塗りつぶすと、もうそれ以上手を入れる事はできなくなります。１枚の絵に２年も３年もかけられるようになれば、精緻な絵も画く事ができると、専門書の執筆の体験を通して理解できました。大観は、伝説によれば、画面に墨をぶちまけハンカチでそれを拭い取りながら作品を作ったといいます。奔放な手法の背後に資質と努力が隠されているのでしょう。

私は京大の工学部で長年数学を教えて参りましたが、自分が学生の頃、難なく理解できた所は教えられません。こんな事も分らんのかと言って学生の心を傷つけます。あるいは、全然分らなかった事が何年か経って自然に分ってしまった事も教え難いです。「年期を入れんとなァ」と誤魔化します。例えば３次元から４次元への飛躍の所などがそれです。これらに反して、これは一体なんだろう、この証明法はどうして思いついたのだろうと、いろいろ苦労して会得した事は学生に伝える事ができます。大学院生相手のゼミなどで、君は証明は一応理解できているようだが、その証明はどうして思いついたのか説明してごらん。…こんな風に考えてみたら。アッそうですか、そうだったんですか、分りました有り難うございます。と学生の顔に喜色が表れます。

梅田先生は絵はお上手ではなかった。しかし絵画教育で立派な業績を残された。特に余り上手でない児童を短時間で高みに引き上げられた、その魔法のような技をお持ちであった。その秘密が少しわかるような気がします。

## Ⅲ　教育の姿勢

### １．育ちの良さと言葉使い

絵の話はこれ位にしまして、次は先生の教育全般に関する基本姿勢のようなものについて、私の印象をお話しする事をお許しください。

先生は東舞鶴、当時は新舞鶴と言うのが普通でしたが、その新舞鶴の泉源寺という村の豊かな農家の１人息子さんとして、ご両親から大切に育てられた方のようです。私の母がそのように申しておりました。私の母も新舞鶴の地主の娘ですので、何かとそのような消

息が耳に入っていたのでしょうか。舞鶴中学、京都師範を優秀な成績でご卒業になったと聞きました。同じ級の友人の父君が中学校の古参の教師をなさっており「“今誰に習っている？梅田君？うん彼は良くできた”と父が言っていた。」とその友人が話しておりました。また別の友人が京都学芸大学で日本史を専攻しまして、その指導教授が梅田先生を覚えておられ、誉めておられたと聞きました。梅田先生も日本史を専攻され、卒業製作が学芸大学に保存されていたとの事です。師範学校を卒業になり単独で初めて担任されたのが私どもの級であった由。それだけに張切っておられたのでしょう。父兄にも教育熱心な、いい先生であると評判をとっておられました。あの頃は、支那事変〔日中戦争〕が長引き、遂には大東亜戦争〔太平洋戦争〕に突入していた時代ですから、教育勅語を中心とした軍国主義的色彩の濃い教育でした。それはどの先生もそうでした。その中でも特に先生は純粋な気持で初等教育に献げておられました。その熱意は生徒にも、父兄にも、そして同僚の先生方にも伝わっていったように思います。

先生は私達生徒を「君」づけで呼んでおられました。他の男の先生方は皆生徒を呼び捨てでしたから特に目立ちました。言葉使いは優しく丁寧で、他の先生方のように「こうしろ」ではなくて「こうしなさい」と仰っていました。ちょうど、女の先生の言葉使いのような優しさがあり、低学年の生徒には特にそれが温かい救いとなっていたように思います。私の父なんかは、少し優しすぎて子供達が図に乗りはしないかと心配しておりました。上級の悪餓鬼の中には少し陰口をきく者もおりました。もっとも生徒が卑怯な振舞をした時など別人のように激怒され、少々逆上気味のように見え、違和感を感じた事もあります。私は決して大人しい方ではありませんでしたが、先生のその優しさが大好きでした。

## 2．軍歌教育と戦局の進展の説明

ここに展示されている戦争の絵や剣道の絵などからもお分かりのように、教育全般にわたって軍事色が強いのは当時の風潮でしたが、その中でも特に梅田先生はそうであったという印象を多くの人が持っているようです。例えば音楽の時間に軍歌をたくさん習いました。そして遠足の時などにも軍歌を唄いながら行進しました。私は少々皮肉な言い方になりますが、先生は音楽はお得意ではなかった。それで軍歌に逃げられたのじゃないかと想像しています。戦後高校の２年生の頃でしたか、先生に習った「シンガポール入城の歌」を唄ったところ「おい、その節、間違っている。」と友人から注意されました。先生から習ったとおり唄った心算でしたので少々心外でした。ところがその後大学へ入った年でしたか、梅田先生を囲む同級会の席で友人の１人が「先生に習ったあの軍歌いいですねえ。」と言って歌い出したら、先生は慌てて「アッそれは駄目、ぼくの音楽はペケだ。」と手を振られました。先生は軍歌は勇壮なものより悲愴美を愛していらしたのではないでしょうか。戦後の一時期の労働歌は軍歌より遥かに勇壮なものがあります。

当時は、どの教室にも世界地図が掛けてありました。日本・太平洋中心のもので、イギリスは左上の隅に親猿が蹲って仔猿を抱いているように見えます。しかしその地図の大部分はピンク色でした。そこが英国領です。インドも、ビルマ・マレーシア・オーストラリアも、カナダも、それにアメリカも元来イギリスの植民地ですから、地図を一目見ただけで、英国はまさに日没する所なき大帝国です。７つの海にユニオン・ジャックの旗が翻っている様が目に浮かびます。先生はその地図を指し示しながら「これらの国々を解放しなければならない」、その地図の上で、いま日本軍がどこまで進出しているか、戦争の現況を説明してくださいました。姉の組ではそんな話はなかったようで、母は戦局をよく説明してくださる教育熱心な先生だと誉めていました。

## 3．東舞鶴と西舞鶴

軍港都市舞鶴といいましても新舞鶴と舞鶴は２つの別の都市です。２つの都市のカラーの違いを説明しておきましょう。新舞鶴は海軍一色でした。街には水兵さんが溢れていましたが、一番目立つのは海軍機関学校の生徒さんで、恰好の良い海軍士官の制服に身をつつみ胸を張り歩調を揃えて闊歩している姿は若者の憧れの的でした。私も将来は東郷元帥のように連合艦隊を率いて、ユニオン・ジャックを７つの海から追放してやろうと夢見たものです。

ところで舞鶴といえば西舞鶴をさすのが当時の常識でした。こちらは徳川の譜代大名牧野氏３万５千石の城下町で、私どもの学んだ明倫校は藩校であり、父祖代々この学校で学んできました。西舞鶴はあまり軍隊色はありませんでした。もっとも重砲連隊はありましたが陸軍は海軍のように派手ではありませんから目立ちません。ところで新舞鶴はもと浜村といって辺鄙な田舎の村でした。私の母方の祖母が但馬の豊岡から嫁

に来た時の事、裏日本を海岸伝いに人力車に乗ってきたそうですが、人家の稀な海沿いの寂しさはまた格別であった。西舞鶴に入ってやっと町らしくなって、やれやれこの所なら何とか暮らせそうだと一安心していたら、さらにそこを通り過ぎ、海にそって走り浜村へ入っていく、心細いといったらなかったと語ってくれました。明治20年（1887年）頃の新舞鶴です。それが日露の風雲が急を告げると、浜村がクローズアップされて軍港ができ、東郷元帥が司令長官として赴任し「肉じゃが」を発明したりして、一変したというわけです。日露戦争にも勝ち、海軍の高級将校達によって舶来の近代文化が齎されると東西の関係が逆転しました。明治35年（1902年）生れの母の口にかかると「東は標準語を話し、西は田舎弁；東は袴、西は前垂れ姿」とこうなります。高級将校のお嬢さんは特にハイカラで洋服・スカート姿で、縄跳びの時などにチラッと見える下着にはレースの飾りがついていて羨ましかったと話していました。これと同じ話が、韓国の李王殿下の妃となられた梨本宮方子さんの自叙伝にあります。学習院での洋服のお嬢さんのハイカラな下着の事が出ています。方子様と母は同い年ですから、僅か20年位の間に、浜村の小学校は東京の学習院なみに変貌した事が分ります。梅田先生は母より十数歳年下ですから、先生も新舞鶴のそんなハイカラな雰囲気の中で成人された筈です。同僚の先生方の中でも特に若々しくスマートでした。何しろ、その頃まだ珍しかったカメラを持っていらっしゃいましたから。

### ４．武士道教育と詩吟

その優しいハイカラさんの先生と軍国主義教育とは調和しないように感じられますが、軍港・海軍・「新」舞鶴という座標を置いてみますと、決して不調和ではありません。先生のは軍国主義教育というよりは武士道教育といったほうが当っているかもしれません。先生のお考えになっている武士道の美学を様々なエピソードを通して私どもに伝えようとなさったように思われます。またご自分で漢詩もお作りになり、学芸会の時先生作の詩吟に合せて剣舞を舞いました。頼山陽の「蒙古来」の詩も教えていただきました。蒙古北より来る、それを迎え討ったのが「北条」時宗。アメリカ東より来る、それを迎え討つのが「東条」首相と洒落を仰った事もありました。

もっとも武士道教育といいましても、富農の家で成人された先生のは少々観念的・情緒的であったように思われます。先ほども少し申しましたが、私の家は武士の家系ですが、明治維新で禄を失った下級武士の生活がどれほど悲惨なものであったか常々聞かされて育ちましたので、武士道といってもそんなに美しくも甘くもないという感じを持っていました。祖父は13歳で父親と死別し、寺へ小僧にやられ、長じて住職になりました。父は廃仏毀釈の影響下で貧苦に耐え成長したとの事です。武士であったというプライドがかろうじて崩れる心を支えたようです。こんな所にも東と西の雰囲気の差が出ているかも知れません。脱線ついでに申しますと、川口外務大臣の曽祖父様は廃仏毀釈の中で喘ぐ寺院を支え、仏教美術の海外流出などを私財を投じて救われたそうです。そのお祖父様の志を継ぎ、大臣のお母様は「京都仏教美術保存財団」を作り、仏像・仏画の修理に補助金を出しておられます。私は川口さんのご親戚に12年間下宿していた関係で理事の１人になりました。お母様のあと大臣をなさる前の川口さんが理事長、今はご主人が理事長をなさっています。

さて武士道の美学と言いますと、旅順開城の時の乃木大将とステッセル将軍の会見がよく引き合に出されます。敵将の面目をつぶさないように気を配った美しい精神が全世界に報道された話はよくご存知と思います。国語の教科書にも書かれ、音楽にも歌われました。今次の大戦で山下奉文将軍はシンガポール陥落の際、敵将パーシバル将軍を「YesかNoか」と机を叩いて威嚇し即時無条件降伏を迫りましたが、あれをどう思うかと、先生が我々に尋ねられた事があります。私達が返答に窮していますと、日露戦争と今の米英との戦とでは質が異る。今は鬼畜米英を相手にしているのだから、山下将軍の態度はあれでいいのだという答を出してこられました。痩身の乃木将軍と肥満の山下将軍の相反する態度には、武士道賛美を教育の柱にしてきた文部省もさぞかし困惑していた事でしょう。

### ５．ユーゴーのレ・ミゼラブル

このような軍事色の濃い教育が主流でしたが、初めに述べましたヴィクトル・ユーゴーの「ジャン・バルジャン」の話は、当時の世相の中にあって少し異なった味わいの道徳教育の役割を果たしていたように思います。先生はお別れの時「ジャン・バルジャン」の話も最後までできなかったが、自分が諸君に伝えたいと思っていた事は、法律と風習のため社会的に処罰があって、下層の人々が無知と悲惨のもと地獄の苦しみを舐めている、そのような現実が今もなおある事を君達に知って貰いたかったからだと、ユーゴーの序文の趣旨を噛み砕いて説明されました。私はその後６年生の

時だったと思いますが、少年少女向の「ジャン・バルジャン物語―あゝ無情」を読み改めて感動を受けました。ずっとあとになって完訳を読みユーゴーの意図を知る事ができました。さっきお回しした本に、誰もが名と荒筋は知っていて、翻訳でさえ完全に読んでない本の１つとして「レ・ミゼラブル」を挙げていますが、完訳（新潮文庫で５冊）を通して読み、挿絵の入った抄訳を70歳になって求める気にさせるこのような教育もあってよいのではないでしょうか。

### ６．先生との別れ

やがて日本人もまた、その地獄のような惨めな生活を敗戦の中で経験する事になるのですが、その時は知る由もありませんでした。私達は先生とお別れするのがただ悲しく、先生が「60の魂を捨てて何の宝ぞや」と自作の詩を吟じられた時、級全員声を放って泣きました。それを伝え聞いて母親達も貰い泣きをし、何とかもう一度先生との別れの席を設けてやりたいと話し合い、ある夕べ、お米を持ち寄り、私の家の書院でお別れの宴を開きました。後日先生から、私の一生のうちで一番嬉しい思い出だと仰っていただきました。先生とお別れしてほどなく級の半数位が先生のお宅を訪ねた事があります、お米を持って。お昼時になって、１人欠けているのに先生は気付かれ「K君は」と尋ねられ、「帰ったようです」という返事を聞くや否や、パッと飛び出して行かれました。家が貧しく、お米が持ってこれなくて昼になって逃げ出したのです。先生はKを連れて戻ってこられ、気にしないで好きなだけ食べなさいと、とても悲しそうな顔をなさっていました。

戦争は一層厳しく、敗色は日一日と濃くなって来ました。私の父にも召集令状が来、ビルマで戦死しました。それから２年ほど経って公報が入り、葬式を出したのは中学の３年生の時でした。先生は後からそれをお聞きになり、香典を持って来て下さいました。母が子供もほどなく戻りますから、どうぞお上り下さいと言っても固辞され、あまり話もなさらず去って行かれたとの事でした。先生とはその後も２、３度お逢いする機会がありましたが、親しくお話した事はありません。軍国主義的教育と敗戦・父の戦死、そんな事が重なって、先生とは心の隔りができてしまったようでした。先生のご専門は日本史でしたが、敗戦後はもう歴史の講義はしないと決めた。ただ君達にかつて教えた事が間違っていなかったと分った時が一番嬉しいとお手紙をいただいた事があります。

## Ⅳ　むすびに代えて

梅田先生の授業の特徴は、初めに申しましたように、絵画教育と道徳教育であったと思っていますが、しかし何よりも次の時代を担う小学校の児童を育てるという、ひたむきな情熱が私どもの心に訴えかけたのでありましょう。

### １．分数教育について

いま理系離れとか、学ぶ意識の低下、ゆとり教育の弊害とかいろいろと教育に対して社会的な批判がなされています。「分数の分らない大学生」という本まで現れております。しかし顧みますと私どもの時は、分数の計算の意味づけという事は今程やかましく言わなかったように思います。今も鮮やかに覚えていますのは分数の割り算です。記憶に間違いがなければ、梅田先生が

$$\frac{2}{3}\times\frac{3}{2}=1 \qquad (1)$$

と黒板に大書され、「だから分数で割るには、反対にして掛ければよい。」と説明された事です。この事がとても新鮮でした。多分その前に

$$\frac{2}{3}\div\frac{2}{3}=1 \qquad (2)$$

があった筈ですが、こちらの方は憶えておりません。（１）式だけがスポット・ライトを当てたように脳裏に焼きついています。

分数の計算の意味を、数学的に見て正確に、しかも小学生にも分るように教える事は至難の業です。小学校の先生の３割は分数が教えられないと新聞に出てましたが、７割の方が教えられるとすれば大した事だと思います。大学の工学部の先生でも半数は教えられないんじゃないでしょうか。準備もせず、今すぐ、正しく小学生にも分るようにと言えば、恐らく全滅に近いでしょう。私にも自信はありません。大学生が相手なら何とか教えられますが。小学校では、極論すれば理屈抜きに計算の仕方だけを体に覚えさせ、理屈は先述のように印象に残る程度にとどめ、さらに詳細は文章題のところで分らせるようにすればどうでしょう。これも難しいと思います。昔小学生は計算はできるが文章題は駄目でした。今はどちらも駄目になったのでしょうか。

### ２．円周率：３か3.14か

今いろいろ争われているホットな話題です。私どもの小学校の60人近いクラスの中で、円周が直径の３倍だと正しく計算できたのは１人だけだった（私じゃあ

りません）と、梅田先生が嘆かれた事があります。小学校の時は約３だと教えてあげれば十分です。私はそう考えています。反対の方々の言い分は、３と教えると正確に３だと覚え込んでしまう。3.14なら大体３だと頭に残るからという事のようです。それなら茶筒か何かの周を実際に糸と物指で計り

円周／直径＝円周率　　（３）

を計算させて、大体３である事を体験させる。あるいは円に内接する正６角形をコンパスで作図し

直径×３＝正６角形の周＜円周

を図から視覚的に頭にインプリントさせるのも良いでしょう。または、

3.1416：Yes, I have a number.

と書いて、この英文の意味を説明し、英文字の数を数えさせるのも面白いでしょう。この程度の英文なら５年生にもなったら説明すれば分るでしょう。更には

3.14159265358979323846264338327 9

「産医師異国に向う。産後厄なく、産婦御社に虫さんざ闇に鳴く。」と教えれば、子供達は面白がって、小数点以下30桁まで難なく覚えこんでしまう筈です。

大切なのは、（３）式の円周率の意味、すなわち比率とか割合の意味を理解させる事で、まさに分数の文章題です。国語の問題です。

### ３．知識を支える人間性

教育全体の事を考えるならば、言い古された事ですが、知・仁・勇とか、知・徳・体のバランスのとれた人間を育てる事がやはり一番大切でしょう。早くから一芸に秀でた才能を伸ばす事よりも、苦手なものを克服する努力の大切さを教えるべきだと考えています。「玉磨かざれば光なし」と申します。才能を開花させるのは高い人格と自由な精神であると思います。梅田先生も事ある毎に雨だれでも石に穴をあける事ができるのだと励ましておられました。天下の大道を、ゆっくり急がずに、しかし確実に歩む。それが一番の近道のように思います。今の世の中は、高度に知的に組織化されていますから、知識の獲得を急ぎがちですが、基礎・基本を時間をかけて、しっかり身につける事が大切です。古稀を迎えての平凡な結論です。ご静聴ありがとうございました。

（講師　京都大学名誉教授）